次期学習指導要領改定案についての雑感（3）

3月のセミナー通信から書かせてまいりました上記表題の件ですが、今月でしっかりまとめさせていただきます。

当塾塾生の入塾テスト結果より、「三角形と平行四辺形の面積」が求められない子が近年増えてきているとお伝えしました。それらの子がどの点で間違っていたのか、まず説明いたします。

三角形の面積が求められるためには、「底辺×高さ÷2」という公式をきちんと覚えていなくてはなりません。平行四辺形の面積も同様で、こちらは「底辺×高さ」という公式になります。さらにどこが「底辺」で、その場合どこが「高さ」にあたるのか、問題にあわせて認識できなくてはなりません。近年、公式そのものの暗記も不確かな子と、「底辺」と「高さ」の関係が認識出来ていない子の両方が増えています。この原因は推量の域を超えませんが、授業で習った時に公式の意味を深く理解していなかったことや、何よりもそれをきちんと覚え正しく使いこなせるようになるための練習量が不足していたのでは、と考えられます。まさに「暗記・再生の力」がついていなかったということです。ここがまずクリアできていなければ、さらに難しい、思考力を必要とする問題など解けないのは明白です。

さて、やっと本題です。文科省は「知識習得が中心の受け身の学習ではなく、主体的・対話的で深い学びを目指した授業をするように」と授業改善を打ち出しました。この点は大賛成です。「三角形・平行四辺形の面積の求め方」は公式にいたるまでの過程を深く主体的に学べると、その理解も深まり、公式そのものの定着もよくなると思われます。問題なのはそのあとです。文科省は「知識の暗記・再生を基本にした従来型の学力から、社会の変化に対応できる思考力や判断力を重視した学力に質的転換を図る必要がある。」と言っています。知識の暗記・再生なんかより思考力・判断力を鍛えよ、と聞こえます。平成10年の改定で計算力が軽視され、小学校から3桁×3桁の計算が消えた結果、子どもの思考力そのものも低下しました。計算力と思考力は切っても切れない関係にあるのです。計算の過程に使われる脳の力は思考力そのものも伸ばします。知識の暗記・再生の力も同様です。この力も鍛えずして思考力だけの伸びはありえません。「知識の暗記・再生」と「思考力・判断力」は、どちらが大切と言うことではありません。どちらも大切で必要な力です。この視点が文科省には抜けていると、長年現場で子どもたちを見て来た私には思えます。学力の質的変換ではなく追加にさせていただきたかったです。西村セミナールームは今後も変わらず、両方の力をしっかりと鍛えてまいりたいと思います。